

女神達の戯れ

佐久間 優

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネプテューヌシリーズの百合短編小説です。タグにもあるように基本はネプテュ
ヌ受けです。思い切り趣味で書いているものなのでマイナーなCPばかりになると思
います

この小説は“ネプテューヌ総受けシリーズ”というタイトルでpixivに投稿し
たものを少し手直ししたものです

可愛い彼女（ひと）

目

次

可愛い彼女（ひと）

「ブラン！一緒に帰ろー！」

放課後、図書室で読書をしていると急に騒がしい声が響いた。全く、此処では騒ぐなつてあれほど言つているのに（——#）

「もう少し待つて、きりの良いところまで読むから……それと図書室では静かに、常識よ？」

「あはは、ごめん、ごめん。それで今度は何を読んでたの？」

軽く謝りつつ、私の隣に座り、読んでいる本を覗き込む。ネプテューヌの顔が必然的に間近になり胸の鼓動が速くなるのを感じた

「ブラン、聞いてる？」

「ええ、聞いてるわ。今読んでいるのは何かつて話でしよう？教えても良いけど……笑わない？」

無論、彼女がそんな事する筈ないのは分かつている。でもつい聞いてしまう

「そんな事しないよー、失礼だなあもう」

そう言つてネプテューヌは拗ねたように頬を膨らませる。子供みたいだが彼女はこ

ういう

仕草をするときが一番可愛いのだと私は思う

「ふふ、ごめん。今は恋愛物を読んでいるわ：中々面白いわよ？」

「へー、珍しいね。ブランが恋愛物読むなんて：いつもは推理小説とかファンタジー物なのにね」

「そうね、以前は見向きもしなかつたけど、何だか気になつて」

「読み始めたら止まらなくなつた？」

「ええ、内容はありきたりだけど登場人物が一人一人とても魅力的でどんどん引き込まれちゃつて」

「ブランがここまで評価するつてことは相当だね？読み終わつたら貸してよ」

「良いけど……この前みたいに飽きたなんて言わないでよ？」

「や、やだなあ…そんな事しないよ、あはは」

「目を泳がせながら焦つたようにネプテューヌは言つた。まあこの子がじつとして小說を読んでる姿なんて想像できないけど

「あー！今、凄く失礼な事思つたでしょ!?」

「そんな事ないわ」

「本当？」

「ええ、私が嘘吐いてるように見える？」

そう言つてネプテューヌをじつと見つめる。暫く見つめあつていたが、気恥ずかしくなつたのか彼女は顔を背けた

「顔を背けたら分からぬでしょ？ほらこつち向いて？」

背けた顔を両手で掴み、此方を向かせる。ほんのりと頬が紅く染まつていた
「ぶ、ブラン…顔が近…んんっ！」

あまりに可愛くて、我慢できずキスをする

「うう…いきなり何するのー／＼／＼

「何つて…キス」

「それくらい分かつてるつてば！誰かに見られたらどうすんの…！／＼／＼

真つ赤になつて怒るネプテューヌ。正直、あまり怖くない…というか寧ろ愛らしい

「良いじやない、見せ付けてあげれば。それに今は二人きりなんだし誰も見てはいない

わ

そう言い、もう一度キスをした。

「こほん…あのーお二人とも？利用時間終了3分前なので、そろそろ戸締りしたいんで
すが（ーーーー；）

む：誰だよ、私達の邪魔すんのは…振り返るとそこには本の上に乗つかつて浮いてい

る小さな人が居た

「イストワール先生。居たんですか？」

「最初から居ましたよ！（ノ、△、）ノお二人があまりにもイチャイチャしているからタ
イミングを逃しただけです！（？ヘ？井）」

「あ、ごめんなさい。ほ、ほらブラン帰ろ…！」

「ちよ、ちよつと引っ張らないで」

そのまま引きずられるようにして図書室を後にした

「ごめん…」

「つーん」

校舎を出てからずつと拗ねたままのネプテューヌ。まあ私が悪いのは重々承知して

はいるのだけれど、ずっと無言のままは流石に堪える

「私が悪かったわ。まさか看られて見られてるとは思わなくて…」

「つーん」

「うう…ネプテューヌ、どうすれば許してくれる？」

「…チュー」

「え…？」

「もう一回、ちゅーして？さつきみたいのじゃなくていつもしてくれるような優しいやツ」

恥ずかしそうに、でもはつきりと言う彼女は顔だけでなく耳まで真っ赤に染まっていた。余程恥ずかしいのを抑えて言つてくれたのだ、期待を裏切つてはいけないわね

「ネプテューヌ…」

彼女の名を呼び、そつと肩に手を置くとピクリと彼女の身体が震える。だが視線は私を捉えたままだつた。そんな様子を愛しく思いながらそつと口付ける。

「これで許してくれる？」

「もう一個だけ…良い？」

「ええ。何をすれば良いの？」

「えつと…手、繋いで？」

そう言つて彼女は右手を私に差し出した。私は自分の手を彼女の手に絡めるように繋ぐ。所謂、恋人繋ぎというやつだ。

「ブラン…これって//／＼」

「このほうがお互いを近くに感じられるでしょ？//／＼」

平静を装い言葉を発するが顔に熱が集中するのを感じる。うう、恥ずかしい//
「うん……ね、ブラン」

「ん？何かしら」

「この手、ずっと握つててね？離しちゃ嫌なんだからね//／＼」

「勿論よ。嫌だつて言つても離さないわ」

彼女の手を優しく握り、私も笑顔で返しゆつくりと歩き出す

いつまでも幸せでありますように……